

「被爆体験から平和を
考えるつどい」のご案内
内です。

☆日時
4月27日(日)
午後2時から

☆会場
高松市の県社会
福祉総合センター
7階大会議室

メインの講演では、
被爆者である長尾昭雄
氏(97歳)が広島での
生々しい体験を語りま
す。さらに、平和病院
が県下で初めて被爆者

ご案内 若い世代 にむけて「被爆体験から 平和を考えるつどい」

体や個人が参加し、
「平和大使」をしてい
る高校生も参加を予定
しています。

今の若者に関心のあ
るタイムリーで、参加
者による手作りの企画
です。

県内のさまざまな団
体、個人からの参加を
呼びかけるとともに、
地域や職場からも若い
世代の人を中心にたく
さんの人に来ていただ
き、いっしょに学び語
り合いまししょう。参加
費は無料。(連絡先Ⅱ
藤沢直人 090・31
61・1134)



健診に取り組んできた
歴史的経験や、高松港
の特定利用港指定を
はじめ、香川が戦場化
されつつある危険性を
学びます。

また平和のために活
動しているいろんな団

讃岐の文学碑めぐり 日治安維持法施行から百年

児童文学者Ⅱ石森延男 (一八九七～
一九八七)と滝口春男

文・写真 深沢 雨根

(26)

「コタンの口笛」で有名な児
童文学者・石森延男は、一九二
四年八月から一九二六年三月ま
で香川県師範学校の教師をして
いた。短い期間だったが、石森

は教え子たちに深い感銘を与え
た。石森延男はある月夜、生徒
たちを連れて屋島に登ったこと
がある。それから四十年後の一
九六六年秋、教え子たちは恩師
の思い出を込めて、屋島山上の
ホテル甚五郎の横に文学碑を建
てた。

きみたちも
虫も歌って 月はあるか

石森に強い感化を受けた教え
子に滝口春男がいる。滝口は一
九一〇年、三豊郡三野町の生ま
れで、一九三〇年、香川師範を
卒業し、三豊郡の吉津小学校に
赴任した。若い滝口は、石森延
男を誇りとし、理想に燃えてい
た。三年生を担当した滝口は、

生徒に日記をつけさせ、文章を
書かせ、詩を作らせた。子ども
たちの可能性を無限に伸ばそう
とした。

一九三三年三月三日、授業中
の滝口は治安維持法違反容疑で
検挙された。警察は教室の中で
ガチャツと手錠をかけ、滝口を
引いて行った。彼の自宅からは
同人雑誌、労働新聞、赤旗など
が押収された。滝口逮捕を受け
て吉津村の村長は、村内の婦人
五百人を集め、「忠孝の精神」
「婦徳のかん養」などを決議さ
せた。

教壇を追われた滝口は、県外
各地をさすらい、職を転々とし
た。戦後、故郷にもどった滝口
は、「子どもの国」という児童
雑誌を発刊したり、「四国詩人」
や「四国文学」などの同人誌を
発行した。

滝口は一九六二年、島比呂志

りだ」とのべました。

物価高騰や消費税による
国民生活の困難さにふれ
「こどもたちにおかわりを
させられない政治でよいは
ずがない。農業を大切にし、
米価も市場価格に委ねて全
く責任持たない、こんな国
政の状況を切り替え、アメ
リカや大企業言いなりの政
治を大本から変えていく」
と政治の転換を訴えました。

4月13日告示、20日投票
の丸亀市議選で1増の2議
席獲得をめざす中谷まゆみ
Ⅱ現Ⅱ、ささい孝志Ⅱ新Ⅱ
の両予定候補が決意表明し
ました。



「政治変えたい」を託 して丸亀で山添・白川氏ら訴え

丸亀市で2月24日、日本
共産党の山添拓政策委員長・

参院議員と白川よう子参院
会で維新の会や国民民主党
などの野党が、ごく一部の

改善のため、与党に
すり寄り、自民党政
治を延命させている
と指摘。「自民党政
治を本当に変えよう
と思ったら、どうい
う勢力が国会、地方
議会の中で大きな
ことが必要か。ア
メリカ言いなり、大
企業優遇をただす、
国民が主人公の立場
を正面からすえた日
本共産党がやっぱり
大きな必要があ
る」と述べ、「今度

民主香川

定価 月 100円
発行所
民主香川社
高松市藤塚町
3丁目13-14
☎(087)834-7311



こそ本当に政治を変えると
いう声を日本共産党に託し
ていただきたい」と呼びか
けました。

白川氏は佐賀空港や山口
県の岩国基地、沖縄の辺野
古など西日本17県の各地
を訪れてきた実感として
「西日本は大軍拡の大波が
来ている」と強調。終戦後
の1945年から続く沖縄
での米兵の女性への性暴力
を許さない、繰り返しでは
ならないと記事を紹介。
「これらは氷山の一角だ」
とし、「いま本当に必要な
は憲法9条を生かした平和
外交や核兵器禁止条約に参
加するなどの平和な国づく

異台教太

昨春秋、初めて
念願の「知覧特攻
記念館」を訪れま
した。「命を無残
に散らすかなかっ
た若者たちの悲劇
を2度と繰り返し
てはならない」と
いう思いが共有さ
れることを期待し
て。

しかし、修学旅行生も多く訪
れるその記念館には、「日本を
守るため、大君のため、喜んで
死んでいきます」という特攻美
化、特攻を英雄視の展示にあふ
れていました。

自分の命と引き換えに敵艦船
に体当たりする作戦に内心は恐
怖を抱いても、疑問を持って
も、拒むことはできず、生きた
いという願いさえ口にできない、
命を軽視する日本の軍隊の恐ろ
しさ。戦争の狂気の中で、特攻
は生まれ、戦争反対を口にする
者は逮捕され、殺されました。

悲惨な戦争の代償とした生ま
れた日本国憲法のもとでまた、
戦争の準備が着々と進められて
いることを私たちは知り、知ら
せなければなりません。



『ふるさと文学館
第四三巻
香川』
(ぎょう
せい、一
九九四)
に収録さ
れている。

が主宰する同人誌『火山地帯』
に、「青い唐辛子」「藪柑子」
の二つの小説を書いている。そ
の頃、滝口は生活のために光村
図書出版(株)の教科書販売員
として西讃地方の学校回りをし
ていた。滝口は日本共産党に入
党したが、一九六八年、心筋梗
塞のため、五十七歳の生涯を閉
じた。

滝口の死後、石森延男は彼の
思い出を次のように語っている。
ふとかれのことを思い出すこと
がある／思い出すとどうも出
会った

死の世界 生の世界を越えて
会った／おたかりやたる声を
高くして語るなぬか
それでもけつこ心の中では書
びあろ。

(以下略 福岡行雄『滝口春男』
八十路書房、付録4頁より)

滝口の小説「青い唐辛子」は
『ふるさと文学館
第四三巻
香川』
(ぎょう
せい、一
九九四)
に収録さ
れている。